

## 「蓋棺事定」

「甫水先生哀輓録」と表題をつけた新聞の切り抜き帖がある（東洋大学図書館蔵）。それは哲学館の創立者にして東洋大学名誉学長である井上円了の大連での急逝とその生涯、業績を伝える新聞記事を集め整理した100頁余りのものである。集められた新聞は、今はなつかしい「萬朝報」、「都新聞」をはじめ約70種で、その新聞の名称からすれば沖縄を除き全国の有力な地方紙及び朝鮮、満洲、台湾の新聞を枚挙できる。のことから推測し得ることは、全国の校友が協力して各自の地元紙の記述を収集し、大学に寄せたものと思われる。しかもその多くは、生前、円了が巡講の足跡を残した地方の新聞であり、巡講の記憶の未だ覚めぬ地元の人々に円了の急逝を一つの事件として伝えるものであったと思われる。例えば「福井毎日新聞」は十数回にわたって「井上円了博士追憶談」を掲載し円了の業績、人柄を伝えている。また「やまと新聞」（大正8年6月7日）は次のような記事を掲載している。それは簡潔ではあるが井上円了の生涯を描ききっている。円了の略歴を記述したあとで、「井上先生が思想界に尽くされたことは非常なもので哲学を一般に普及することに努力されると同時に仏教活論その他の著書によって仏教の革新を叫ばれたことは仏教界に特筆すべきことである之が為哲学館（東洋大学前身）を起こし京北中学京北商業京北幼稚園等を経営して現に是等の諸学校に名譽学校長として幾多人材の養成に尽くされていたのである又我国民の迷信を打破するために妖怪学を組織され晩年には府下和田山に哲学堂を建て之を根本道場として修身教会の主意を宣伝して日本全国津々浦々は勿論遠く台湾、朝鮮等々にも殆ど先生の足跡の到らぬ所はない位に遊説して歩かれた。そして今度も先月の五日に東京を出発、支那満洲に渡り修身教会の趣旨を講演中不幸中途にして薨れられた」と報じている。

これは単に円了の急逝を報じたものというよりは、生前円了が果たした業績を称えるものであったといえる。円了の生涯はかくの如く江湖において評価されており、正に「棺を蓋うて事さだまる」ということである。

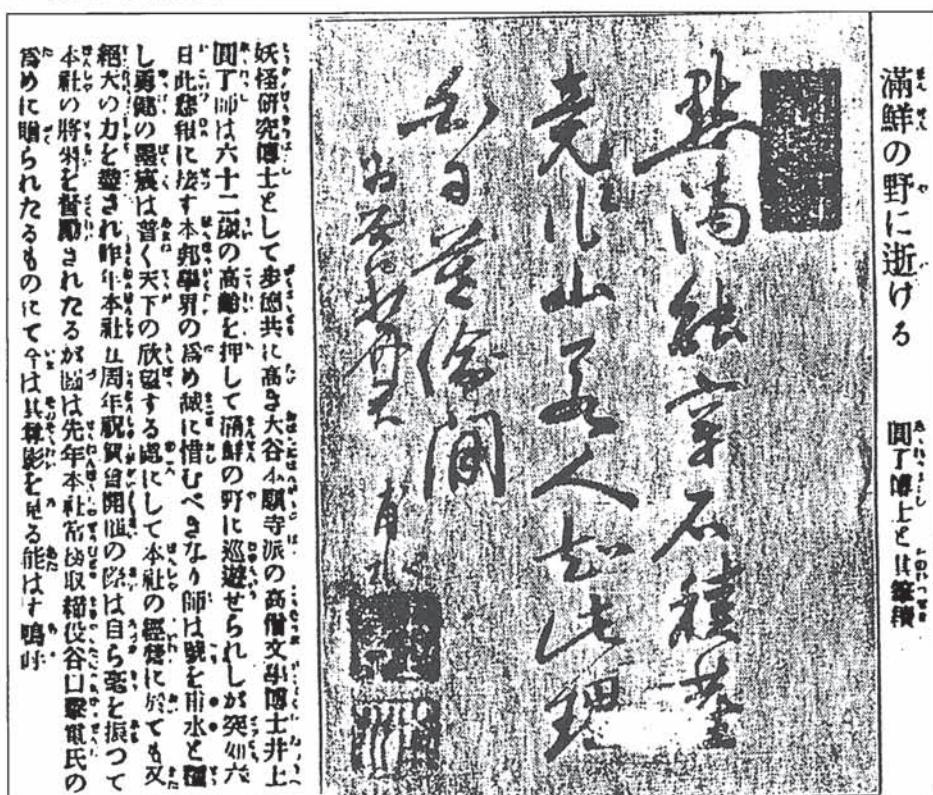
## 明治の思想状況

哲学を教授する専門学校として明治20年（1887年）に設立された東洋大学の前身「哲学館」が、拡充発展して今日の総合大学に至るまでには火災、風災、哲学館事件、戦災等々の苦難があった。しかし、その107年間に行われて来た教育は、一貫して哲学を基底に置く教育を主体とするという「建学の精神」を継承するもので、それは今も「諸学の基礎は哲学にあり」の学是に示されている。

明治時代に創立された私立大学は、近代化を目指す当時の日本が、市民社会形成に当たって必要とした経済、法律、政治等の知識、所謂「実学」を教授する専門学校として出发したものが多い。そこには各大学創立者の時代認識や教育理念を反映した特色がある。これに対して、市民社会形成よりは国家整備を急ぐ明治政府は、学問の真理探究、人間形成よりは国家目的を優先させ官僚養成を主眼とする



福井毎日新聞  
大正8年6月8日



満鮮の野に逝ける

圓了博士と其筆蹟

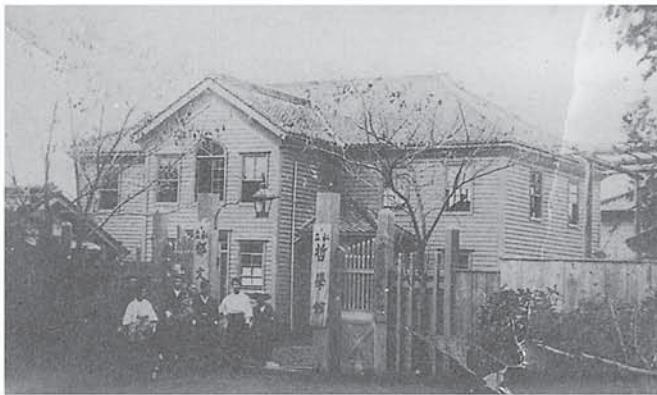
「帝国大学令」を公布した（明治19年）。それは端的にいえば、日本にただ一校存在する帝国大学が全ての知識、従つて哲学も、独占するということを意味しており、大方の庶民は「衆愚」として国家目的の教育から切り捨てられていたといわざるを得ない状況があった。

そのような教育状況が深刻な社会亀裂をもたらすことを憂えた若き円了は知識・哲学を社会一般に広げることを意図して、「帝国大学令」公布の翌年に「哲学館」を設立したのである。

#### 開校の地・麟祥院

明治20年9月16日この寺で哲学館は誕生した。

哲学館・蓮栄町の新校舎  
明治22年8月に麟祥院から移り、11月新校舎なる。  
明治29年12月13日火災により全焼。

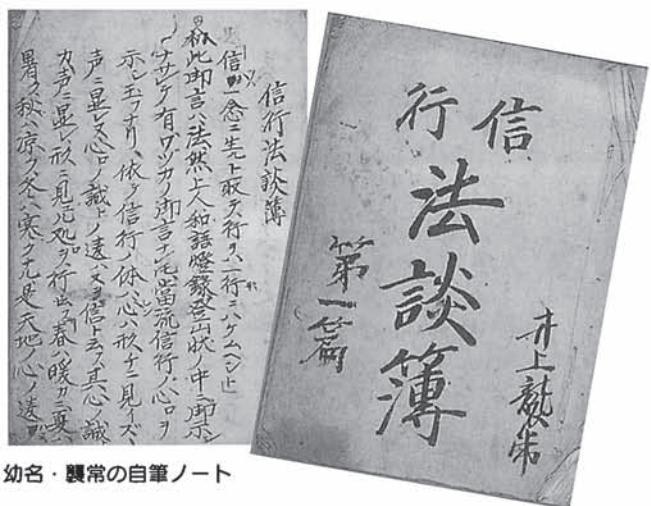


円了は哲学を「思想道理を鍊磨する術として必要な學問」と捉えており、この哲学によって、近代化を急ぐあまり極端な欧化に走っていた当時の社会現実を問い直し、いまなお迷信・俗信に従い、知的官僚らによって「衆愚」と見なされていた庶民、さらには経済的事由等によって向学の道を閉ざされていたものにも、「ものの見方や考え方の基礎」を身につけることによって精神的にも社会的にも自立することを願って、門を開くというものであった。欧化とは西洋近代を模範として近代化を進めようというもので、西洋近代の内にないものは全て旧弊として捨て去ることを不可避としていた。円了はこの欧化によって「旧弊一洗」の対象とされていた神儒仏三教という伝統的教学を哲学の合理的な吟味に耐え得るものにすることも哲学館に托したのである。

## 円了の生い立ち

円了は明治維新の10年前の安政5年（1858年）2月4日（陰暦）、約300年続いた真宗大谷派慈光寺（新潟県三島郡来迎寺村字浦村、現越路町浦）住職井上円悟、イク夫妻の弟妹6人の長男として生まれた。この地方の各寺院の本堂には100年の供養を行っていることを示す紙片が幾つも張り出されているほど、現在も信仰の篤い地方である。円了の幼名は岸丸、襲常である。得度して円了とし、甫水と号した。それは出身地浦村の「浦」を分けたものであるが、他に非僧非俗道人、四聖堂、不思議庵、妖怪窟、不知歌者、無芸庵拙筆居士等の号を多くの著・書に残しているが、何れも円了の行った仕事に関連している。幼名襲常は『老子』の「用其光、復帰其明、無遺身殃、是謂襲常」に由来し、円了の名について中村敬宇に問われたとき、「円満万徳、了達諸法」に由来すると即座の思いつきで答えたこともあるといわれる。

世襲制をとる真宗寺院では長子が住職を継ぐきまりなので、円了は早くから僧侶に必要な修業を積むことになる。その一環として、円了は慶応3年10歳のとき隣村片貝村の蘭医石黒忠恵（のち軍医総監、子爵）の漢学塾に入り、周易、毛詩、尚書、礼記、文選、四書を学んだ。石黒忠恵の懐古談によると、「中々学才の有る兒で、余は其頃国史略を読ませ又之を講授したものだが、幼少乍ら理解も良く歴史の事実の記憶も確かで、自分の設問に対しても何時も明確な答えを為したもの」だという。石黒は蘭医として当時の西洋通の一人であるが、塾生の成績が良いと「西洋紙」を賞として与えたり、西洋という新世界の紹介もなした。円了はこの石黒塾で儒学を学ぶとともに西洋と初めて出会ったのである。石黒と円了の交わりは単なる子弟関係というよりは、石黒塾で明治維新を経験し、共に一つの歴史に立ち合ったとの感が強く、終生にわたって円了の後援者の



幼名・襲常の自筆ノート



長岡洋学校時代の円了

役割を果たしている。石黒は円了が大学を卒業するに当たって、進んで就職の斡旋をしたが、円了は官途に就くよりも、野にあって庶民教育に当たることを明らかにしたその相手であり、哲学館創立についても有力な後援者であり、哲学館大学、東洋大学の顧問にも就いたのであり、円了は後に、東洋大学の恩人の一人に数え、石黒に深く謝するところがあった。

明治2年石黒の上京後は、旧長岡藩儒者木村鈍叟の下で漢学を学ぶとともに、萬国新話、地球説略、博物新論、西洋事情等、新しい時代の到来を告げる書物も読んでいる。その頃の勉学状況を伝える円了の詩に、「浦里開蒙集小兒、讀書終日勤孜孜、午前共誦支那語、午後相傳英米詞」があり、また「新施罰刑懲惰慢、常窮道理教愚痴、早成内学國家学、要立文明開化基」の詩は、円了の将来を直ちに示唆している。

少年期の円了の風貌人柄については、「先生容貌魁梧<sup>カイゴ</sup>、巨顔大頭、幼にして穎悟奇偉、不撓の氣あり。其の為さんと欲する所、為さざんば止まず」（林竹次郎述「先生行状一斑」）といわれるところであり、また『仏教活論序論』において、「余幼より世人と其の好惡を異にし、…旧里に在るや、同郷の児童と共に遊ばず。凡そ児童の楽しみは飲食遊戯の外に出でずと雖も、余の楽しみは独り然らず。出でて江山の間に入れば、草木の森々としておのずから鬱茂し、流水の悠々として、去りて帰らざるを見、心竊に怪む所ありて、家に帰りて其の理を思う。之を思うて達すること能わざれば、独り茫然として自失し、幸に其の理に達すれば、微笑して自得の状を呈す。是れ余が衆と共に群せざる所以なり」と自ら少年期の姿を描いている。それは少年期にすでに哲学へ向かう資質が開花していることを示している。

## 勉学の時代

明治6年、円了16歳のとき高山楽群社に入学、英学の初步を学び始めるとともに旺盛な読書を記録している。

この明治6年は、和漢洋にわたる当時最高の知識人が相集い「卓識高論ヲ以テ愚蒙ノ眠ヲ覺シ、天下ノ模範ヲ立テ識者ノ望ヲ曠セザランコト」を目的として「明六社」が結成された。その同人が説く西洋の新知識、特に西周が積極的に翻訳紹介した哲学は從来の学問観を大きく変えるものであり、円了は後にこの哲学を専攻することになる。しかしその同人達は福澤諭吉を除いて全て知的官僚であり、その立場から「愚蒙ノ眠ヲ覺ス」というのであり、そこには牢固として抜き難い「愚民觀」があった。当時の知識人の多くはこのような「愚民觀」を当然のものとしていたが、このような立場からの啓蒙は円了のとるところではなかった。

明治7年（17歳）、円了は長岡洋学校（現県立長岡高等学校）に入学し、本格的に西洋諸学を学び始める。在学中、旧藩子弟が排他的傾向に走りがちであったため校風刷新と自治協和の精神高揚を目的として「和同会」を結成した。それは同志的結合による「小結社」に依拠した円了の啓蒙運動の最初であるが、その名の由来は「和而不同」（論語子路十三）によるとも「和光同塵」（老子「和其光、同其塵」）によるともいわれる。明治9年、句読師（助教）に抜擢され、同時に寄宿舎監に推されて後進の指導に当たった。明治22年に創刊された雑誌「和同会」には「自由と放恣の弁」「狐火の理」などの論文を寄せている。

明治10年、県令の推薦を得て京都東本願寺の教師教校の英学生に加えられた。この教師教校は大谷派諸寺の子弟から25名を選抜し、普通学を教授するとともに、更にその中から英学生4名を選抜するという人材養成機関であった。円了は、この年に設立された東京大学に東本願寺給費生として留学することを命ぜられ、明治12年9月東京大学予備門に入学した。当時の東京大学は外人教師に依り英語で講義がなされていたため、3年間の英語研修が必要であったためである。

明治14年9月、円了は24歳で東京大学文学部哲学科に入った。哲学科の新入生は円了ただ一人であった。哲学科では井上哲次郎に東洋哲学、原坦山に印度哲学、フェノロサに西洋哲学を学んだ。

在学中の円了については、明治15年（25歳）哲学科2年生のときには友人と月1回会合してカント、ヘーゲル、コント等を研究したことが伝えられている。また、「明治十

六年秋、文三年生」と脇付けをした。『稿録』という円了自筆の英文ノートが残っている。それは明治16年から20年（？）にかけて円了が読破した英書の要約を英文で記したもので、更に和文で注記が若干なされている。前から書き始められた部分には約86項、末尾から書き始められた部分には約10項が数えられ、哲学、宗教、歴史、倫理、社会学、心理学の諸分野にわたっている。特にシュヴェグラーの哲学史について詳細なノートを作成しており、150余の哲学者についてその所説を略述している。特にスコットランドの啓蒙思想、英国の経験論、フランス啓蒙思想、カント哲学に関心があったことが推測される。ノートの見返しには、「俗海向誰復問津、満城風雨幾昏晨、胸間独払迷雲去、古得真如月下春」の詩が記されているが、哲学を学ぶことによって長年胸中にあった「迷雲を払い去」ことができたという述懐であったと思われる。

## 円了の学会活動

在学中の明治16年、円了は友人と団り「文学会」を組織し、輪番で研究発表をするなど相互に研鑽を重ねた。この文学会は発展を遂げるにつれて、その目的を異にする者も多くなることがあって二分し、一つは「国家学会」となった。円了は友人三宅雄二郎（雪嶺）、棚橋一郎らと神田錦町學習院内に会合して「哲学会」を創立した。明治17年1月26日の哲学会第1回例会には西周、加藤弘之、中村正直、西村茂樹、外山正一ら当時の哲学界を代表する29名の入会参加があった。

また、17年の夏頃から円了は妖怪学研究に着手して、大学内に「不思議研究会」を開設した。入会者は三宅雄二郎、田中館愛橋、箕作元八、棚橋一郎らであり、それはのちに「妖怪学研究会」に成長発展する。

円了は明治18年10月31日（28歳）、卒業論文『讀荀子』を提出して東京大学文学部哲学科を卒業した（東京大学時代の哲学科の卒業生は有賀長雄、三宅雄二郎、井上円了

の3名である）。円了は佛教界最初の文学士であり、大学当局より「印度哲学研究」を命ぜられ、また旧師石黒忠恵より官途への斡旋があったが、野にあって宗教、教育方面での事業を生涯の仕事としたき故をもってそれを固辞した。

卒業と同時に円了は第1回「哲学祭」を挙行した。以来、渡辺文四郎の描いた「四聖像」に中村正直の讚を得て、これを毎年掲げることを常としたのである。



四聖像の軸

明治20年1月、円了は哲学の大衆化を図って「哲学書院」を興すとともに、それを拠点として哲学会機関誌「哲学会雑誌」（のち「哲学雑誌」と改題）を編集刊行した。そしてその第1号に巻頭論文「哲学ノ必要ヲ論シテ本会ノ沿革ニ及フ」を発表した。それは若き円了の「哲学観」を反映するものである。

通常、理論と応用に区分される哲学は、「要スルニ理論ノ学ニシテ、思想ノ法則事物ノ原理ヲ究明スル学ナリ。ユエニ思想ノ及フトコロ事物ノ存スルトコロ、一ツトシテ哲学ニ関セザルハナシ」と捉えられ、次の3点が強調されている。

1. 哲学が諸学の基礎である。
2. 哲学の研究・普及が文明を発展させる。
3. 東洋哲学の研究も必要であり、東西両洋哲学の研究が結局のところ日本の近代化を進め、国家の富強を助ける。

そこに見られる「諸学の基礎としての哲学」という把握



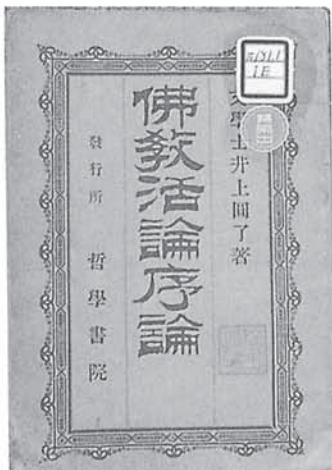
昭和31年彫刻家・山脇正邦製作の白山校舎旧5号館四聖のレリーフ（左からカント、孔子、釋迦、ソクラテス）

こそ、今まで東洋大学が学是としている建学の精神である。

円了は、この「諸学の基礎としての哲学」に照らして仏教も東洋の哲学であるという視点から『佛教活論序論』が公刊された（明治20年）。「人誰レカ生レテ国家ヲ思ハザルモノアランヤ。人誰レカ学ンデ真理ヲ愛セザルモノアランヤ」という書き出で始まる同書は、長らく排仏毀釈という政府主導の動向によって沈滞していた佛教界に大きな刺激を与えるとともに、「護国愛理」の語は広く受け入れられて、佛教再興者としての円了の名を高からしめた。円了は相次いで著書を刊行した。

近代化を急ぐ者は旧弊一洗を叫び、佛教を古きもの不合理なるものとして捨てようとするが、哲學的に考察するとき、キリスト教は果たして合理的であるのかを論じた『真理金針』（「耶蘇教を排するは理論にあるか」を改題）は、間接的に佛教を擁護するものであった。『哲学要領』前後篇は日本人の手による最初の哲学史の書きおろしであり、哲学を普及するために書かれたものである。また『哲学一夕話』によって哲学への目を開かれた者も多く、若き西田幾多郎もこれを読んだことを書き残している。これらの著書を通して円了は哲学の普及に最も力を尽くしたのである。

これらの著述の刊行に当たったのは「哲学書院」であるが、これは、円了が大学卒業以前から「将来は宗教的教育事業に従事して、大いに世道人心のために尽瘁してみたい」と考えており、哲学普及という言論活動の拠点として設立されたものである。「哲学書院」は円了の著書を初め、「哲学会雑誌」など多くの哲学書、思想書を刊行したが、それにとどまらず、哲学会、国家学会等の事務所となるなど、円了が関係した人々の思想運動、文化事業のための集会場、同志的結合の場として、日本思想史上重要な役割を果たしたのである。



東洋大学図書館蔵



哲学館設立当時の円了

東京大学在学中の自筆英文ノート「稿録」

## 哲学館開設の旨趣

当時の日本は、不平等条約改正を急ぐ余り、後に「鹿鳴館時代」と称されるような、極端に皮相的な欧化政策をとっていたが、それに伴って浮上した外国人の「内地雜居」の問題に関しても、民選議院開設の請願運動に関しても、当時最高の思想家集団であった「明六社」などは露骨な愚民觀に立って「時期尚早論」を展開していた。このような社会状況に批判的であった円了、三宅雄二郎、棚橋一郎らは、杉浦重剛、志賀重昂らと団結して「政教社」を設立し、翌21年から雑誌「日本人」を発刊するが、それは宗教、教育、道徳における日本伝統の価値観、社会諸制度における長所、美点の維持、発達、改善（国粹保全）を主張するものであった。その機關誌「日本人」の名が示すように、「日本主義」を主唱したが、それは欧化主義隆盛の中にあって「日本人とは何か、日本社会はいかにあるべきか」を問うものであった。その主張するところは、薩長両藩閥による中央集権国家の確立、上からの啓蒙、極端な欧化政策、庶民を切り捨てる国家主義に対して、下からの啓蒙、庶民の側に立つ国民主義と呼ぶべきものであって、明治中期の思想界を二分するほどの大運動であった。そのような勢力になり得たのも、この運動を進めたのは、円了をはじめ欧米の近代的知識、教養を身につけた者であり、民衆の側に立とうとするものであったからである。それは「ナショナリズム」の名で呼ばれるにしても、円了らが与したのは「国家主義」ではなく、「国民主義」であった。それは明治政府が進める統一国家という「大結社主義」ではなく、在

哲學館	哲學館廣告	勝海舟から贈られた鎌倉期の仏像
印發行者 刷業者 名 佐久間 司成馬 介瓦	哲學館	哲學館
明治二十二年十月十八日	新築入學費用目的	新築入學費用目的
明治二十年十月	茶教會英學授講師及學科	茶教會英學授講師及學科
明治二十年十月	錄講義留學	錄講義留學

### 一枚ものの折り込み広告

野民間が各々に思い描く「市民社会像」によって結合する「小結社主義」であり、円了はこの「小結社主義」に立って多くの「小結社」を作り下からの啓蒙を試みたのであった。「哲学館」もその一つである。

明治20年6月、円了は年来の宿願であった哲学の研鑽とその普及を実現するための学校の設立構想を友人達に図り、志を同じくする者を広く日本全国に求めることにした。その構想は「哲学館設ノ旨趣」によって公表された。その内容を要約すると次のようである。

文明が開化するのは主として知力の発達によっている。知力が発達するのは教育の方法によってであるが、高等の知力を発達させるのは高等の学問、すなわち諸学の中での最高の学問である哲学、である。哲学こそ万物の原理を探究し、その原理を確定する学であって諸科学を統轄する学というべきものである。だがその哲学を教授するのは帝国大学のみである。又、翻訳書も多く刊行されているが、それに拠るだけでは原典の真意を了解することは難しい。そこで各々の専門家と相談し、哲学専修の学校を設立して「哲学館」と呼ぶことにした。

哲学館は帝国大学に進学するだけの資力のない人（余資なき者）及び原書を読むに至るための時間的余裕のない人（優暇なき者）に1年ないし3年の短期間で哲学を学べるようにし、論理学、心理学、倫理学、審美学、社会学、宗教学、教育学、東洋諸学など哲学に直接に関係する諸科を研修するための途を開くものである。この哲学館の教育が成功するならば、ここに学ぶ者個々人ばかりか社会国家に有益であり近代化にとって一大補助となるだろう。

## 「哲学館」の開設と後援者

この「開設の旨趣」は勝海舟、加藤弘之、西周、中村正直、外山正一らの知人、著名人に送られるとともに雑誌にも掲載され、円了の意図を広く江湖に訴える役割を果たし、多くの人の援助を得ることになった。それは、哲学会、国家学会、政教社、東京大学関係者を網羅するものであった。

後に円了は当時を回想して、「はじめ哲学館を創立したときには、もとより無資本で、またほかから扶助保護を受けることもなく、すべて有志の寄付によって創立費をまかないました。当時本館の旨趣に賛成して多少の寄付をくれた人は280人ありました。したがって、哲学館は280人で設立したものといってよいわけです」と語っている。

このような多くの賛同者の中で、加藤弘之（帝国大学総理、のち哲学館顧問）、寺田福寿（大谷派僧侶）、勝海舟の物心両面にわたる援助は特に顕著であり、「哲学館の三恩人」と長く感謝されている。

明治20年7月22日、円了は「私立学校設置願」を東京府知事に提出し、3日後に設立許可を受けた。専任の教員は円了と清沢満之であった。

国家目的を実行する官僚の育成を主眼とする教育政策を立てている明治政府は高等教育を「私・民」に認めるとは当初からなく、私立学校の設立を認めて、それは「専門学校」としてであった。しかも私立の教育機関を監督することはあってもそれを援助育成する意志のない文部行政の下では、専門学校というものの、私立ということの故に名ばかりであって、国家的な高等教育機関とは全く差別さ

れた状況の内に置かれていた。このような差別はその後も続き、高等学校から大学へという正規の課程を辿らなかつた者は、正科ではなく「選科」に入学したが、彼らは図書館の利用、教室での聽講もままならなかつたと、哲学の選科生であった西田幾多郎は語っている。しかし、このような国家からの優遇措置を受け得なかつた私立学校は、その反面、創立者の教育理念を実現する実践の場であつて、個性ある教育を行い、特色ある学風を育て得たのである。それは、世に「三田の経済、早稲田の政治、白山の哲学」と称されたことの内に見てとれるが、相次ぐ教育令の改正によって、次第に国家意思が教育について干渉することも多くなり、ついには「哲学館事件」の如き露骨な干渉事件も起つた。

明治期の私立学校の成立をその教育内容から見ると、市民社会の形成期に当たつて民間に必要な度合いの高まつた「実用の学」を教授する学校が最も多い。それを大別すると、(1) 法学、経済等の社会科学系、(2) 語学を中心とする人文科学系、(3) 医学、物理などの自然科学系、が多く、(4) キリスト教、仏教、神道などの宗教教育を中心とした学校も設立されているが、哲学教育を主目的として設立された学校は哲学館をおいて他にはなく、まことにユニークな存在であった。



哲学館の三恩人  
左から  
加藤弘之  
寺田福寿  
勝 海舟

哲学館の開館式は明治20年9月16日、本郷区竜岡町（現文京区湯島）の臨済宗妙心寺派麟祥院において挙行された。哲学界の長老に当たる加藤弘之、西村茂樹を始め100余名の参列があった。先ず円了が開館の旨趣を述べ、次いで文科大学長外山正一「哲学の普及」、棚橋一郎「哲学の要」、辰巳小二郎「哲学の世間に及ぼす効用」の講演があった。これらのテーマを見ると、何れも哲学の普及という円了の意図に賛同し、哲学館の果たす役割に大きな期待を寄せていたことを窺い得る。開館式終了後、直ちに麟祥院の一室において第1学年の授業が開始された。22年11月本郷区蓬萊町に校舎新築するまで、麟祥院を仮校舎としていた。

## 哲学館の教育目的

哲学館の開設は円了をして哲学教育の大衆化、我国の思想確立、国民精神の振起に当たらせると同時に、独力を以て草創期の哲学館の經營に当たり、講義録の発行、巡講によつて寄付金を募るなど、哲学館の經營に日夜を分たず鏤骨碎心の努力をなさしめたのである。「哲学館開設の旨趣」および開館式当日の演説において円了は、自ら構想した哲学館の教育はどのような人を対象とするかを示すことによつて、哲学館の教育目的とその対象を具体的にした。

- 第一に、晚学にして速成を求むる者、
- 第二に、貧困にして資力に乏しき者、
- 第三に、洋語に通ぜずして原書を解せざる者。

この三者は、いうならば専ら経済的事由によって大学の課程を歩めぬ者であり、哲学館はこの三者に開いたのである。そのことは「設置願」においても明らかである。

「設置の目的」、本校は哲学諸科を教授し専ら速成を旨とす、

「教授法の要旨」、全科を普通高等の2科に分ち普通科は哲学諸科の大意を教授し、高等下級は哲学に必要の関係を有する諸科を教授し、高等上級は哲学諸科の一層の高尚に涉るもの教授し、教授はすべて邦語講義を以てし生徒

をして容易く了解せしむるを要す。

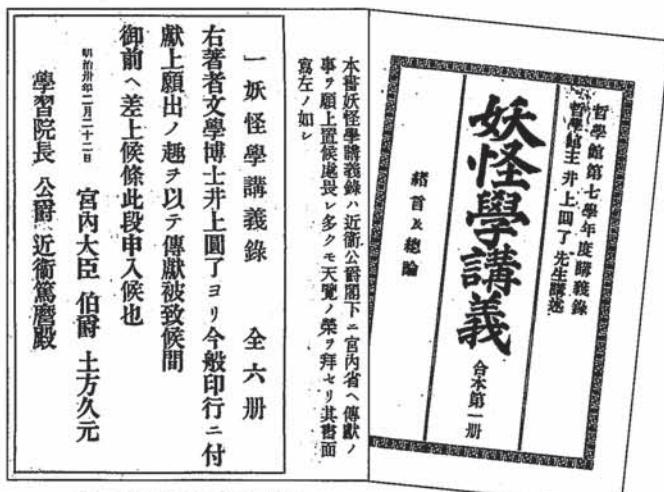
のことから推量し得ることは、哲学館は哲学者の養成を目的とするのではなく、哲学の大意概略を学ぶことにこそ主眼を置いているということである。その理由は、哲学を学ぶ人が多くなれば社会の開明も進み、また教育家、宗教家の道を選ぶ人が哲学を学べば専門とする学問の理解を一層深めることになるからである。

さらに、哲学には大きな役割がある。哲学は全ゆる事象事物についてその原理を探るものであるから、哲学を学ぶことは西欧の諸科学の関係を知るのに有効であり、また、西洋哲学の合理性を学ぶことは、空想的で臆斷に満ちた東

洋の学問の弊を補い、それを振起することができるからである。そのためには東西両洋の哲学を兼修することが必要であり、それを目的とする哲学館のような学校が必要となるというのである。日本語による速成教育がその特色となつた。

## 哲学館に寄せる若き教員の情熱

開館当初の授業を担当した教員の内には、開館に至るまでの協力者が多いが、二つの特色がある。その一つは、講師19人の内13人が東京大学の出身者であり、円了が時にふれ、哲学館を文科大学を模しているということも故なきことではないということであり、その2は講師の年齢が若いということである。円了が29歳、担当者のほとんどが20代、30代であり、なかには仏教論を担当した村上専精のように講師を勤めると同時に一学生として哲学を学んだものもいた。これら新進気鋭の士を網羅した講師陣の瑞々しい知性と新しい教育に寄せる情熱による生彩ある講義は館主のみならず世人の注目するところであった。円了は館主として経営に従事するとともに、心理学応用並びに妖怪説明、哲学論（唯物論唯心論）を担当した。



校友から寄せられた合本

当初は入学試験がなく16歳以上の男子を対象として格別の制限を設けておらず、定員は50名であった。その中には「子持ち」「孫持ち」もいたので、学生の年齢の幅は広く、4、50歳の中年までいたので学生の素養も様々であったが、そのことは哲学館に期待するのは単に青年層に限られないということを示している。次第に入学者数も増加したので入学定員も追加されるに至っている。

円了の目的からすれば、哲学の教育と哲学の普及とは同じ位に重要であった。このことからすれば、哲学館に学生を集めて哲学を教授するだけでなく、なお遠隔の地にあって勉学の機会を得ていない者にも、哲学を学ぶ機会を提供

することによって哲学普及の途を開くことが望まれた。そこで哲学館では21年に「館外生」制度を設け、各講師の講義を直ちに筆記印刷し、「哲学館講義録」として毎月3回配布し、質問にも応じたのである。これは我国における通信教育と講義録の初めをなすアイデアであって、今日では各種各様の形態の通信教育が社会に貢献している。講義録で学ぶ者も多かったが、それによって向学心を更にかき立て、遂には上京して哲学館に学ぶ者も多かったといわれる。

## 第1回海外視察

当時の我国は依然として欧化万能の世相を呈していたが、これに反して欧米諸国では東洋学の研究がますます盛んになっていることを聞き、円了はその実情を視察するため、明治21年6月9日から1年間の第1回欧米旅行を行つた。アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、エジプト、イエメンを回り、帰途セイロン、シンガポール、サイゴン、香港、上海に寄港する大旅行であった。特にイギリスではオックスフォード、ケンブリッジ両大学で多くの東洋学者と会談し、また、各地の人情風俗、教育制度、寺院制度の調査研究を行い、各国の政教組織の整備と文化向上の著しいことを知った。それと共に、各国とも大学に東洋学の研究者を擁してサンスクリット、シナ学等の研究を推進していること、独仏の東洋学校には日本学の学科が存すること、に驚嘆するのであった。ここにおいて円了は我国においても在来の学問を研究すべき必要を痛感し、それを哲学館において行わねばならぬとの信念を持った。

外遊中の日記を雑誌「日本人」に連載し、また「歐米各国政教日記」及び「日本政教論」として刊行した。そして東洋諸学の研究と教授を哲学館において実行すべく、「哲学館ノ目的ニツイテノ意見」を公表した。それを要約すると次の通りである。

ドイツ・ベルリンでの円了

欧米諸国はその国固有の学を教育の基本としている。各国に固有の学はその国の独立を助ける要素を含んでいるの



で、自國に固有の学を愛護することは一國独立の思想を植えつけることになる。しかし、我國には日本固有の学を教育の基本とした大学もなく、それを愛護する必要を唱えるものもない。我國には我國固有の史学、文学、宗教学等が現に存している。これらを愛護し専攻方法を立てるのは、固有の学を振起するに必要なだけではなく、日本の人心を維持し独立を保全する上でも必要である。それ故、「日本主義の大学」を設立する必要がある。それは日本に固有の学を基本とし、加えて、西洋諸学を以て扶翼させるものである。その目的は日本国の独立、日本人の独立、日本学の独立にある。このような真の意味での「日本主義の大学」を設立するのは一大事業であるので、その大成には数年を要するであろう。従って、その目的を達成するためには、哲学館がしばらくその役割を担わなければならない。幸い哲学館では東西両洋の学を兼修している。しかし、日本に固有の学を愛護するという大事業に向かうためには更に哲学館を改良しなければならない。それは、日本主義の立場に立って、一方で日本国の独立を維持し、他方で日本固有の諸学を愛護するということの強調である。

外遊によって円了が得た結論は、日本の真の独立を達成するには、旧弊一洗の名の下に日本の伝統を捨て、文明開化の名の下に欧米の文物を優先するという傾向を変えて、日本固有の言語・宗教・歴史、その他風俗習慣を改良保存せねばならぬ、ということであった。

ここにおいて円了は、哲学館は単に西洋哲学の教育を行うだけでなく、日本固有の学の教育をも行うという確固とした意図をもって、哲学館の改良に着手したのである。

当時すでに館内生200余、館外生約900に達していたので、哲学館改良の意味もこめて、本郷区駒込蓬萊町（現文京区向ヶ丘）に新校舎を建築した。



絵はがきになった小石川原町鶏声ヶ窪の校舎（大正から昭和初期）

## 哲学館の改良、日本主義に立つ大学

新校舎への移転式は明治22年11月13日に行われた。その折の円了の移転旨趣を説明する演説は、外遊の結論であったことを具体的に述べたものであった。

- 第一、我邦久來の諸学を基本として学科を組織すること、
- 第二、東洋学と西洋学の両方を比較して日本独立の学風を振起すること、
- 第三、智徳兼全の人を養成すること、
- 第四、世の宗教者、教育者を一変して言行一致、名実相応の人を教育すること。

円了はこれに統いて、歴史学、言語学、宗教学の研究を主目的とする日本主義の大学、日本大学ともいべきものに向けて哲学館を改良することを明らかにした。その演説の基底にあるものは、日本固有のものの改良ということであり、それを果たすために西欧諸学の長所を援用するということである。

円了が帰国後にうち出した「日本主義の大学」という構想は、一つには自ら視察した欧米の教育事情から導かれたものといえるが、さらには当時の日本の置かれていた國際情勢、国内事情に対する円了の危機感が大きく関わっていたと思われる。アヘン戦争以来、西欧列強は中国の植民地化を進めているという事実は、日本にとっても等閑視できぬ大いなる脅威であり、「国家独立」という問題は朝野をあげての日本全体の緊急課題であり、現実問題であった。その対応策は、諸々の旧弊を一新して、強力な国民国家を形成する以外に道はない、というのが当時の大半の共通認識であった。それを急速に達成するには、「西欧化即近代化」と見なされても致し方のない方途を選んでの一大国家改造を行うと共に、日本を植民地しかねない旧幕府以来の

歐米列強との不平等条約の改正という日本国民の悲願の実現が不可欠である。そのためには殖産興業、富国強兵を策することが最優先するということは当時の国民各層に共通する目標であった。しかし、「国家の独立」という目標においては政府も人民も共通するところがあったが、それを達成する方法、あるいは国家の形態・内容については意見が様々にあった。その相異は、政府と人民、官と私、公と民という対立となって現れ、教育においても官学対私学という関係となって現れたところである。このような対立が激化したとき、専制化を進める政府に対する「民」の抵抗が

頻発した。円了らが設立した「政教社」も、専制化を進め極端な欧化主義をとる政府に対する民間に自発した反対運動であって、その立場からの日本主義、国粹保存主義の主唱であった。しかし、政教社社員は何れも西欧の学術・文科に深い素養をもつ知識人であり、従って彼らの主張するところは盲目的な排外主義に立つ国家主義ではなく、西欧文物の長所を認め、それを援用しながら日本固有の長所(国粹)を保存しようとするものであった。そのような意味でのナショナリズムは「国民主義」というべきであったのである。

## 日本主義と宇宙主義

円了の主張する日本主義もこの国民主義であって、日本の独立の基礎を確立しようというものであり、狭い意味での国家主義ではない。「哲学館講義録」29・30号(22年10月)に掲載された講演「哲学館目的」はこのことを明らかにしている。すなわち、

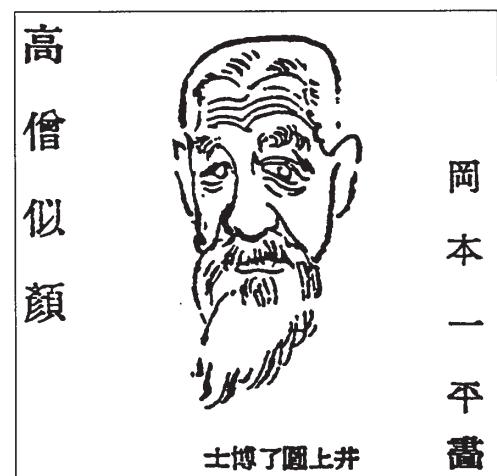
日本の現状を見ると「唯一に欧米の美に眩して妄りに之を模し自国固有の国風を忘却するに至らば不知不識の間國滅亡の慄状に陥らざるを得ず」と、先ず、極端な欧化主義をとることによって日本の精神的荒廃に至ることに危機感を示している。また、「最も深く注意を用い先ず日本独立の基礎を確立し彼の長を取り乍ら我の短を補い我の短を補い乍ら日本の独立を維持し益々開化ならしめ、益々文明ならしめんとする精神なかる可らず」と述べて、西欧諸学を援用しながら日本の精神・学術・思想の独立をはかり、それに依って近代化を進めようとする精神を育成せねばならぬ、と日本のとるべき方向の変換を主張している。しかし、この日本の基礎を固める精神を形成するにしても、少數の知識人、上流社会だけではこの目的を達成し得ない。それ故、「国民全体をして其精神を具へ其氣質を成さ」しめなければならない。そのとき重要なものは言語、歴史、宗教である。言語は人と人との空間的に結合し、歴史は一国の風俗、習慣、学芸、礼節等を総称するもので時間的に国民を結合する。また、宗教は衆人の意想を結合し伝統的精神を保続する時間的空間的な結合をなすものである。この三者が国民を自然に結合し人心を堅固にするので、これによって「一国独立の風」、「国民一致の主義」、「日本なる主義」が形成される。これが形成されたとき初めて、西欧文物の輸入も単なる模倣のためでなく、確固として定立された日本的なものに化入、变成することが可能となる。いうならば「消化の輸入」が可能となるというのである。

円了はこの日本主義に立つことを決意し、その実行を可

能とするように哲学館を改良するというのである。そして「哲学館は全く日本主義を以て立ち日本の言語歴史宗教を完全ならしめ以て之を維持せんことは實に其目的」だという。しかし円了のいう日本主義は単に日本一国に思想的に閉鎖するという狭隘なものではなかった。もっと大きな目的があるという。哲学館が立てる日本主義は日本一国の独立を堅固にするものであるが、それは表面の目的である。裏面にはもっと大きな「宇宙主義」という目的がある。日本主義とは相対的な立場の主張であり、これに依拠して世界を見れば、日本及び日本人は外国・外国人と区別され、各国はそれぞれ政治法律、風俗習慣を異にすることが強調され、従って自国を偏愛し内外自他の区別を専らにする国家主義に至る。しかし世界・人間という視点から見れば、地球上いかなる国も地球上の一国でしかなく、いかなる国の国民も人間において変わりはない。さらに大きな視点から見れば全ては「宇宙の一物」にすぎない。理学、哲学の研究は自他内外、国の差異によってなされるのではない。反って自他の差異に立って研究するとき、理学、哲学は成立しないのである。

円了のいう「宇宙主義」は宇宙の法則を研究すると同時に、極端な欧化主義、国家主義を排除するものであった。しかし他方で、相対的に物を見、自他の区別をつけなければ「特殊」は成り立たない。従って、相対的に見る日本主義と絶対的に見る宇宙主義は不可分のものであり、二つは一つになって初めて完全な見方となる。すなわち、表面的目的である日本主義は言語、歴史、宗教に依拠して日本に固有の精神的基盤を確立し、裏面の目的である宇宙主義は宇宙の真理、哲理を探究するものである。

円了は、明治政府がとった方便としての欧化主義、専制化を進めるための国家主義には宇宙主義の視点がないことを指摘し、宇宙主義と表裏一体する日本主義の確立の必要を痛感していたのである。



## 人間性形成を重視する教育

明治政府の行った教育の近代化は専ら知育の面で行われた。社会一般からいっても、西欧文化を憧憬する書物や社会実用の書物が多く刊行されたが、德育に関するものはほとんどなかった。まして欧化主義に立つ限り、西欧の倫理、道徳の直接輸入が当然とされ、特に10年代から20年代にかけての倫理関係の書物は英米の倫理書の翻訳が大勢を占めていた。明治を通じて最も多く売れた本は、スマイルス著中村正直訳の「西國立志篇」といわれるが、そこで提示された道徳上の徳目は勤儉、正直、忍耐等であったにしても、資本主義初期当時の欧米の成功談であって、いうならば経済社会における立身出世を全国的に肯定するものであった。円了はこのような社会の趨勢を憂うところが大きかった。このような日本の状況は、「道徳的裸体主義」に立っているとして、後に多くの倫理書を刊行し、修身教会の運動を推進することになるのである。

高尚な知識を与える知育も德育と併進しなければ効果はなく、哲学も単に書物の研究をするだけでは意味はなく、その実行に努めなければならぬという。「哲学館目的」において、德育は知育と異なり教育されずとも自覚するものではあるが実行し難い、反って不善不良の行為を為すものも多い、このような人が社会を周旋支配する間はその国は眞の開明に達することも独立を維持することもできぬ、という趣旨のことを述べている。円了はその德育実践を具体的に行うため、哲学館に「寄宿舎」を設置した。その「寄宿生之心得」によると、「人物人品を養成し道義徳行を鍛磨するを以て目的とす」として寄宿舎が作られたが、何ら学生生活を束縛するような規則は設けず、善惡の判断は学生個々人の自覚にまかされ、寄宿生は自主的に「道法品行」に注意することのみが求められた。さらに円了は外遊中に経験した英國の家庭團欒が德育に果たす効果の大なることに着目して、寄宿生を対象とした「茶会」を催し、円了自身が学生と談笑することを通じて人間性の育成をはかった。そこに見られるのは、人間性の主体的な形成、対話の重視である。対話こそ、思想鍛磨の術としての哲学の最初の形態であり、教師と学生がお互いの人格を尊重し合うという精神の発露であった。円了はこの精神の具体化を寄宿舎に托したのである。

## 哲学館の教育課程の改組、専門科新設

円了は、将来の「日本主義の大学」に向かう前段階として、哲学館に専門科を設ける計画を発表した。明治23年9

月の「哲学館ニ専門科ヲ設クル趣意」によると、従来の学科（3年）を普通科とし、その上に国学、漢学、仏（教）学、洋学の専門科（2年）を設けるというものである。それによると資金は見積総額10万円であり、その全てを募金に頼ることとし、その募金が半額5万円に達した時から1科ずつ開設するものとした（洋学科は開設に至らなかった）。そして、明治23年7月、第1回の得業生24名を世に送り出した。

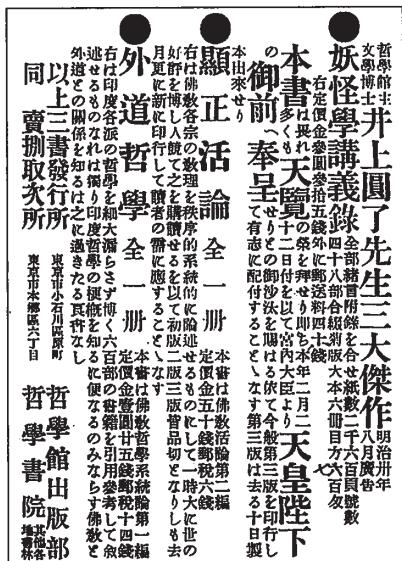
専門科設置の資金を広く江湖に求めるため円了は全国巡講を開始した。それは日本全国を講演して歩き、求めに応じて書を書き、あるいは哲学館の教育方針を説明しながら募金を行うというものである。演題には、巡講開始に先立って発布された「教育勅語」の解説、妖怪学、迷信退治などが挙げられ、哲学の普及と庶民啓蒙に努めた。この専門科設置のための全国巡講は明治23年11月から28年8月に至るまで行われ、文字通り東奔西走して1道1府32県を訪れ、220ヶ所818回の講演がなされた。草鞋ばきの徒步を主にした困難な巡講であったが、それに耐えたのは哲学館に寄せる情熱のなせる業であったといえる。この募金は円了個人のためのものとの誤解も時には起ったが、円了自身は全く私心を捨て、「禁酒、禁煙諸事僕約」の語を名刺に印刷し、これを実行しながらの募金であった。このような苦労を重ねて集められた寄付金は8250余に達した。哲学館創立以来、民衆からの寄付金を基盤として学校を経営するという円了の方針は一貫しており、専門科設置という事業も全国の民衆の支持に依拠するものであった。この寄付金を本として、明治28年、専門科設立のための敷地を小石川原町鶴声ヶ窪（現在の白山校地及び京北高校、京北商業校地）に求めたのである。この全国巡講はその後も、修身教会設立とその運動の普及を目的として、その死に至るまで継続された。

円了は全国巡講のかたわら、政府の圧迫下にあった仏教の振起を図って、言論信教の自由を求め、『仏教活論本論第二篇顕正活論』を刊行するなど仏教の公認運動に力を尽くした。



明治29年6月文学博士となる

明治24年、哲学館内に「哲学館日曜講義」を開き、民衆に哲学館を開放した。これは今日いうところの社会人を対象にした公開講座に該当する。更に同年、館内に「妖怪研究会」を設立した。これは巡講中に採取した資料、全国から寄せられた報告事例、多くの和漢書を渉猟しての資料、に基づいて、妖怪学として体系化し、民間に見られる迷信の打破（妖怪退治）に当たろうというものである。これは国民思想の適正を期する円了の庶民啓蒙の一環であり、明治26年11月には、「妖怪学講義録」として集大成された。同書は明治30年8月に天覧を得て、300円の恩賜金が下付された。



本の折り込みチラシ

芸を興さん」というのであって、日本学の樹立の必要なることを世に訴えたのである。

## 哲学館大学への道、円了文学博士となる

円了は明治28年の新年祝辞において、これまで「日本大学」、「日本主義の大学」を哲学館の将来像として描いて來たが、「哲学館将来の目的は東洋大学を設立するにあり」と、初めて「東洋大学」の名称を用いている。そして、これまで入試を行わず広く門戸を開いていたが、入学志望者の増加とともに、入学者の素養が一様でないことも著しくなったので、同年9月より入学試験を行うこととした。合わせて、哲学館の学科を改めて教育学部、宗教学部の2部制とし、各々に予科（1年）と本科（2年）を設けた。そして教育者、宗教者の養成を目的として、学科の整備を行った。これによって、後に専門学校令による「教員無試験検定」への道を開くことになった。

翌29年6月、円了は『日本佛教哲学系統論』により文学博士の学位を允許された。論文による学位請求の端初であ

る。さらに、館内に「哲学研究会」を設けた。その会則緒言によると、「一国が万国の間に独立するを得るは、啻に富國強兵なるが故のみにあらず、思想の独立、学芸の進歩も其の主要なる原因」である。それ故、「東西を參照し、古今を網羅し、以て思想の独立を計

り、以て日本風の学

る。また、同年12月、漢学の伝統の絶えんとする現況を憂い、「漢学専修科」の設置を発表した。しかし、その発表の直後、哲学館は類焼の炎にあい、進行中の各種事業、授業も一時中断せねばならなかった。これは円了が後に哲学館の「三大厄日」と称したもの一つである。第1は蓬萊町校舎が完成直前に台風で倒壊した風災（明治22年）、第2がこの火災、第3は哲学館事件（35年）の人災である。

明治30年、原町に新校舎が再建されると同時に仏教専修科が設置された。また、「妖怪学講義」が天覧に浴し御下賜金があったが、それを有意義に使用するため、これに有志者の寄付金を加えて京北尋常中学校を設立することとし、32年4月より開校した。その後、京北実業学校を併立し、38年には京北幼稚園を開園した。これによって、円了の一貫教育構想は緒についたのであるが、道徳教育は幼少の時に最も効果的であるとの確信によるものであった（但し、円了は志半ばにして大連に客死したので、小学校の設立には至っていない）。

明治32年、私立学校卒業生の教員免許に関する省令25号が発令され、これによって哲学館では、修身科教育科、漢文科につき師範学校、中学校、高等女学校教員の無試験検定が認定された。文科系の学校でこの無試験検定の特典を得たのは哲学館が最初であり、哲学館の教育水準の高いことが認められてのことである。哲学館及び後身の東洋大学では設置学科の全てについてその特典が認められた。

この認可指令により、高等師範学校専修科規則に合致した学制に変更する必要が生じたので、哲学館は予科1年本科3年となし、本科は教育学部を教育部と改めて哲学部と並立させるとともに講堂及び図書館を設置した。哲学館発展に必要な施設、条件が整った明治35年4月、「哲学館大学部開設予告」を発表した。それによると、欧米の大学には神学部が設置され宗教を主たる研究対象にして宗教学も深いものがある。しかし、我国には之に対するような教科大学はない。儒教、仏教は研究すべき対象であり、その専門的な研究をすることは不可欠である。幸い哲学館はその専門的研究とその教授の任に当たり得る学科編成を行い得るので、その任に当たろうというものである。

大学部開設の曉には、原町の校地を京北中学の専用とし、別に1万坪ほどの校地を購入して哲学館を移転させることを予定した（購入されたのは、現在の哲学堂公園がそれに当たるが、実際には哲学館事件などで実行されず、修身教会の本山としての哲学堂が建設された）。

## 第2回外遊と哲学館事件

円了は明治35年11月15日、第2回の外遊を行った。主に欧米諸国及びインドの学校以外の教育事情を視察するためであった。その外遊中に「三大災厄」の一つである、所謂「哲学館事件」が起こった。それは哲学館卒業生の教員無試験検定の認可取消しを受けたという事件である。

その事の起りは以下のようである。同年10月の倫理学試験に際して、中島徳蔵講師（第6、7代学長）がミュアヘッド著（桑木巖翼訳）『倫理学』をテキストにして「動機善にして惡なる行為ありや」という問題を提出したが、それについて一学生が「動機ならざりし結果の部分を見て、之に善惡の判断を下すべきに非ず。否らずんば自由の為に弑虐をなす者も責罰せらるべく…」の答案を書いた。これについて文部省派遣の視学官隈本有尚、隈本繁吉の両名は、この「弑虐」を「君の弑虐」も含むと拡大解釈をしてこの答案には国家の秩序を破壊するに至る不穏当な点があるとして、また、中島講師がこの点について何ら批判を加えずに教授したるは不都合であると上申したため、結果的には無試験検定の特典が取り消されたのである。この事件は文部当局の不当な態度に難ありとして、当時の倫理学界、

哲学界、教育界をあげての大問題となつた。原著者のミュアヘッドもロンドンより書翰を寄せ、自説が国体上社会風教上決して危險思想を含まぬことを弁論し、また當時倫理学界を代表した「丁酉倫理会」も「ム氏の動機説を、教育上危険と認めず、又倫理学の教授に際し、中島氏が、其引例を其儘になし置きし所作を以て、深く咎むべき不注意に非ずと認む」と弁論し学の自由を高唱したのであった。しかし問題の帰着するところは、文部省側の旧道徳と民間の新道徳の衝突であり、学問を統制しようとする国家意思と学の自由の対立であつて、ついに認可の回復はならなかつた。

外遊中の円了は、本事件に関して慎重な態度をとることを教職員、学生に指示するとともに、

苦にするな暴しの後に日和あり

伐ればなほ太く生ひ立つ桐林 の2句及び

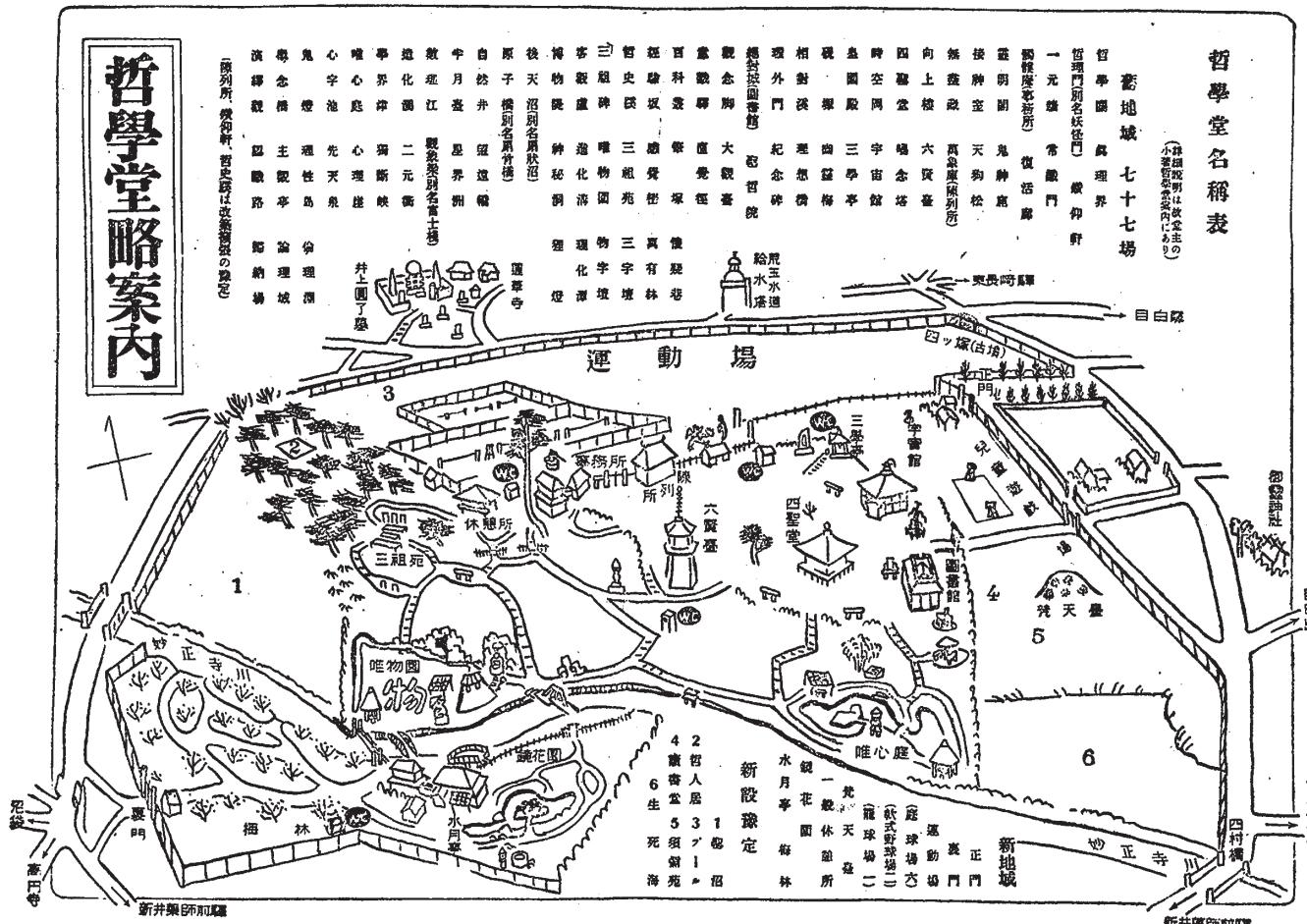
今朝の雪畠を荒らすと思ふなよ

生ひ立つ麦の根固めとなる

火に焼かれ風にたをされ又人に

伐られてもなほ枯れぬ若桐 の2首を以て、哲学館関係者を激励したのであった。

また、この事件で引責辞任した中島徳蔵講師は、辞任す



るに当たって倫理学原書10数巻を図書館に寄贈するとともに「哲学館生徒に与ふの書」を寄せた。それは「快活に慎重に又堅忍に道徳宗教及び教育の大事業を經營せんこと即ち是哲学館の本領にして又諸君の大志願に非ずや」と、深い憂色に包まれていた学生を鼓舞するものであった。

## 哲学館大学への改称と哲学堂建設

円了は明治36年7月27日に帰国すると同時に、「広く同窓諸子に告ぐ」を発表した。それは、無試験検定の特典を失うという痛手を被った哲学館関係者に向かって、「此上は独立自活の精神を以て、純然たる私立学校を開設せざるべきからず」と、痛手を克服して前進すべきことを述べたのである。ここにおいて円了は三つのことに着手したのである。

第1は、哲学館大学を開設し、大学部（5年）、専門部（3年）、予科（1年）及び別科を置き、大学部別科（5年）、専門部別科（3年）に分けた。

第2は、哲学堂の建設である。

第3は、修身教会の運動と全国巡講である。

円了は帰国1ヶ月後の36年8月27日、専門学校令に依る専門学校設立認可申請を行い、「私立哲学館大学」と改称することとし、10月1日に許可された（2日に告示）。そして、37年4月1日に開校する運びとなり、同日午前、大学開校式を挙行した。円了は哲学館創立以来、講師として尽瘁してきた加藤弘之、村上專精、松本愛重の3名を名誉講師に推戴するとともに、他に23名に謝恩状を贈呈した。これらの人々は常に哲学館の経営、教育に力を尽くした人々であった。

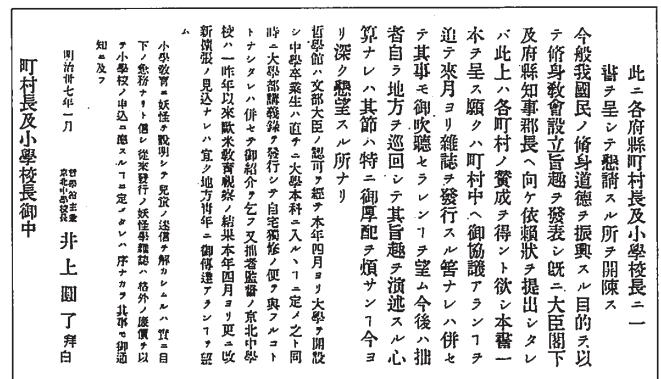
また、学制改革につづいて、顧問、評議員の制度を設置した。創立以来、哲学館の運営に協力、援助を惜しまなかつた縁故深き人々を「顧問」とした。顧問とは、大学が重大な事項に出会った場合諮詢すべき機関であつて、加藤弘之、石黒忠恵、重野安繹、井上哲次郎、島地默雷の5人が就任した。

また、評議員には哲学館運営の援助者、講師として多大の貢献をなした中島徳藏、松本文三郎、内田周平ら7人が就任した。この評議員の任務は学制の改革、学生の進退に関する事項に関する学長の諮詢機関として現在に及んでいる。

同日午後には、哲学堂の開堂式が行われた。哲学堂は、大学建設予定地として購入された和田山（現中野区松が丘哲学堂公園）に建設され、現在は中野区の管理するところである。『哲学堂由来記』によると、哲学館大学開設、哲

学館事件、修身教会開始の三つを記念するものとして建設されたが、広義には社会教育、哲学普及、精神的公園として活用するのが目的であった。哲学堂（別名四聖堂）では四聖を祭る哲学祭を毎年行うこととし四聖に関する講演を行つて現在に至っている。その後、さらに拡張されて六賢台、三学亭、唯物園、唯心亭、三祖苑が設けられた。散策するうちに自ずと賢哲の風懷に接し、その思想を考えるようになるというものである。

明治37年2月、円了は「修身教会」の設立を発表すると同時に「修身会雑誌」を発行した。それは円了が外遊中、欧米では「教会」が道徳性の維持に重要な役割を果たしていることをつぶさに観察した。これに対して、我国にはそのような施設もなく、日々道徳性の涵養を行う習慣もない。通常の人にとって、道徳教育は尋常小学校に限られており、小学校卒業以後は道徳に関することは一切行われていない。従つて日本の国民の大半は「道徳的裸体主義」のうちに放置されているのが実情である、と円了は考えたのである。ここに至つて日本の国民性を向上させるには、道徳の普及、徹底を図る必要があるとして、西欧の教会にならい、修身道徳を教える場としての「修身教会」を設立したのである。円了はこの修身教会を全国的な組織に確立することを企図して全国町村単位でのその設立を呼びかけた。それについて、哲学堂が修身教会の本山の役割と、機関誌発行の任に当たるが、地方組織は各々の創意工夫によって運営に当たるもので、哲学堂はそれら地方組織を統轄するものではなく、反つて、地方町村の自治に委ねたのである。円了はこの修身教会の普及のため再び全国巡講を行つたが、修身教会の場を小学校、寺院に求めたのである。特に寺院がその場を提供することは、仏教が社会教育、啓蒙に積極的に参加することによって、仏教自身の改革を為すことを期待したことであった。また、日露戦争当時、円了は修身教会による道徳教育の必要を朝鮮、清国の人士にも呼びかけて賛同を得てもいる。また、戦場にあって荒々しく生き



修身教会設立にあたり出された依頼状

て来た兵士が戦後社会に復帰するに当たって、戦場にあっては当然である或る種の荒廃が社会に持ちこまれることを憂えて、戦後の道徳を堅固にすることも唱えた。戦勝に湧く民衆に迎合するが如き評論が一般的であったとき、精神的、道徳的な戦後処理を企図した者は円了を除いてはいなかった。

修身教会の目的について、円了は道徳の根幹に据えられた「教育勅語」の解説も行うとしているが、それは表面的目的であり、裏面の目的は「良心」にあるといっている。教育勅語を無視することは時代的に危険なことであつただろし、教育勅語は日本に特殊なことである。日本に特殊な倫理を超えて、円了は世界に普遍である「良心」の倫理を全国に巡講したのである。円了を見るとき、その表面の発言、行為にのみ捉らわれては誤解を招くということの証左である。

## 円了の退隱

哲学館事件によって起こった教員無試験検定の特典の取り消しは学生数の減少を招き、経営難に陥らざるを得なかつた。円了は全国を巡講しながら寄付を募り経営の立て直しに努めるが、その激務の故、その他のこともあって病を得て、学長を退任するに至つた。その退任後は、名誉学長として哲学館大学を陰で支援しながら、専ら哲学堂に依拠して社会教化に全力を傾注することになった。この退任については、病気、事業、社会、家族のために退隱の止むなきに至つた理由四つをあげて雑誌に発表している。円了の退隱を雑誌に発表せねばならぬほど、哲学館以来の卒業生は増えており、又、教育界の重大事件であったためと思われる。

円了の述べるところは、哲学館設立当時の目的であった「哲学の普及」はほぼ達成したので、学校組織を解散して、社会教化を専らにする講習会組織に再編成しようとしたが同意する者がいなかつたということである。また、特典取り消しに関して再申請を求める卒業生に対して積極的にこの事について動こうとしなかつた円了に対する批判も大きくなつた。何れにしても、哲学館大学は専門学校令によつて認可されたというそのことの故に、哲学館大学は国家の教育制度の中に位置づけられたのであって、教育に対する強力な国家意志は円了個人の意図を超えてはるかに強く哲学館大学に押しつけられていたのである。創立者の教育理念、教育に対する情熱とその努力を以てしても最早いかんともし難い時代に入つたのである。

円了が退隱に当たつて発表した詩がある。

「獨力經營二十春  
喜び看たり校運の幾  
回か新たなるを 自  
今退隱何事をか成さ  
ん 朝に泉流を汲み  
夕に薪を拾わん」。

確かに円了は哲学館草創の時以来、哲学館大学に至るまで、最も困難な時代の経営に全力を投じて東奔西走していたことは事実である。しかし決して「獨力經營二十年」でなかつたことは、円了自身哲学館創立に当たつて

280人からの寄付を得たことに即して「二八〇人で創立した学校」と述べていた。また、哲学館大学に拡張されるまでに「寄付金統計三万七千八百三十六円四二銭一厘」があった。この端数「四二銭一厘」に着目するならば、恐らく庶民の血のにじむような寄付であったであろうと思われるが、このような人たちの支援があったということはこの詩に欠落していることも事実である。

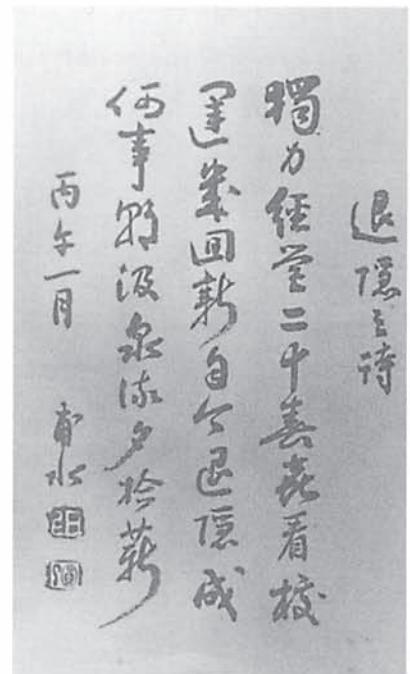
獨力で大学経営に努力して來たという自負がある限り、世間は往々にして哲学館大学は円了の私有物と考えたり、あるいは一宗一派の学校と憶測されもした。円了は退隱することによって、学校が私有物でなく、社会国家の共有物であり、公共事業として経営して來たことを示すべく、哲学館出身の前田慧雲（第2代学長）を後継者と決定したのである。この時、円了と前田慧雲の間で取りかわされた契約は次の三ヶ条である。

- 一、哲学館創立の旨趣を繼續すること、
- 二、財團法人になすこと、
- 三、他日学長を辞するときは、出身者中の適任者を以て相続せしむること、若し出身者中に適任者なき場合には、講師をして嗣がしむること。

また、京北中学校長には湯本武比古が就任した。

円了は明治39年1月1日を以て哲学館大学、京北中学の名誉学長、名誉校長に推戴された。

同年6月6日、私立哲学館大学は「私立東洋大学」と改称すると同時に、「私立東洋大学財团」を組織し、「私立東洋大学寄附行為」を定めたのである。これによって、大学



円了退隱の詩

は個人的経営から法人経営に移り、現在の東洋大学の運営の形態が成ったのである。また、京北中学も「私立京北財団寄附行為」を定めたので、以後、別個の法人となった。

円了の退隠の報が全国に達すると、長年の労苦を謝すとともにその功勞を記念すべしの声が澎湃として起こり、寿像建設の運びとなった。新海竹太郎鋳造の上半身像が成って39年10月17日除幕式が挙行された。そのとき朗読された校友滝川浩の「頌徳辞」には「英材の教育前後数千人、人文斐然として見る可し。欧水米山両次の賦遊得る所鮮からず、北馬南船幾回の布教益する所孔だ多し」の句があり、円了の生涯が教育と社会教化にあったことを端的に示している。

## 南船北馬、市井巷間の哲学

円了は明治33年以降、修身教会普及のための巡講を行っていたが、退隠後は巡講に専念して席の温まる暇もなかつた。その巡講の様子は自ら記録した『南船北馬集』（全16編、最近17集原稿を発掘し復刻）に精わしい。それは講演旅行の日記であり、講演会開催主体、地方校友の様子、地方の物価、宿泊料金、地方の人情風俗方言等の克明な記録である。その全体からいうと日記ではあるが、訪問地の生活風習等の観察、膨大な漢詩に托された風土景觀の鑑賞、からすれば秀れた紀行文学と称し得るものである。この『南船北馬集』によると、明治39年から大正6年までの12年間に、全国48市、2,061町村、2,679会場で講演し、聴衆のべ1,259,865人を記録している。これは更に大正8年までの分を起算すると講演約5,000回、聴衆126万人に達している。実に驚くべき数字であるといわざるを得ない。

当時の交通事情からするとその巡回の旅は困難で、時には草鞋かけ尻ばしより、馬、人力車、河川の小舟に頼っての道行きであり、汽車を利用し得る時にも3等で、弁当も握り飯であった。例えば朝鮮に渡るとき台風に遭い船待ちの時間があったが、早速船内の旅客を集めて講演を行うといった具合で、これは又、宿泊先でも旅の疲れも厭わず、数人のためにも話をすることに見られる円了の姿勢であった。

巡回旅行は長期にわたることが通常で、時には1年内136日、1日数回、の講演を続けたのである。このような巡回に明け暮れた生活であったが、余暇を見出しても啓蒙書を多く出版していた。

東京大学哲学科を卒業した数少ない哲学徒としての円了は、『仏教活論序論』、『哲学一夕話』『哲学新論』等の公刊によって仏教再興者、学者の名で著名となった。それら



井上円了胸像  
明治39年10月17日に大学正面階段の左側に建立された。  
胸像の高さ約50cm。昭和4年図書館完成後その側に移設された。  
昭和43年夏大学紛争で壊された。

の著述は、いま読んでも密度の高いものであり、明治哲学史の研究者船山信一氏はその著『明治哲学史』において、円了の主張した「現象即实在論」を以て「日本型觀念論」の創始者に挙げており、また、アメリカの日本思想研究者も円了をとりあげて論ずることが多い。しかし今日、日本思想史、日本哲学史を通覧する時、円了にふれることがあつても円了を主題とする研究に出会うことはない。円了は日本哲学史の流れにおいて傍流と目されているか、あるいは無視されており、いうならば忘れられているといえる。それは円了にとって不幸なことではあるが、それは円了が自ら選択したことの故である。それは円了がアカデミックな哲学に専念してその哲学を体系化する途を捨て、大学の外なる社会に進んで社会啓蒙という形での社会哲学の実践に従事したためである。しかもその方法は講演であった。その講演の内容は聴衆の心に深く刻まれるにしても、聴衆が各々に世を去るとき、円了の思想もこの世を去って行ったのである。いうならば、円了の思想は書物の形をとって書庫に貯えられてその名を残すという類のものではなく、地方の人々の心に残すという形をとったために、円了の聲咳に接しなかった者には忘れられていったのだといえよう。

円了はそのことを十分に自覚しており、自らの学問を「田学」と表現している。所謂「官学」は社会上層の知識人階級を対象にして官僚養成を目的としており、そこには一般庶民は入る余地がなかった。これに対して円了が自らの学問を「田学」と称する所以は、当時、「田夫野人」と罵られていた民衆を対象にして地方に入ったのである。そこには、日本の真の基盤を形成するものは地方であり、地方の庶民であるという「地方重視」の姿勢があった。しかしそのような哲学の実践は「市井巷間の哲学」として、中央志向のアカデミックな哲学はこれを軽視する風潮が濃厚であったのである。

## 円了の客死、円了精神の継承

修身教会運動を生涯の仕事と定めた円了は、精力的に巡講を行っており、大正8年には満洲（現中国東北地方）において講演をなすべく5月5日に出発した。各地での巡講を行い、6月5日に予定されていた大連の会場（西本願寺付属幼稚園）に到着したのは午後8時であった。休む暇もおかず、30分後に講演を始めたが、その最中、気分不快を告げて退場された。医師の診断は「脳溢血」であった。その意識混濁の中で、「聴衆を待たせて氣の毒だ、明日の講演は大谷派別院と満鉄会社と都合三つになる。演題は…」と口にしながら昏睡し、6日午前2時40分に長逝された。それは急逝というべく、円了の計画からすれば道半ばにしての逝去といわざるを得ない。家族及び東洋大学関係者が遺骨を擁して帰国、明けて6月22日、東洋大学校葬が挙行された。享年62歳、菩提寺は中野区蓮華寺、戒名甫水院釋圓了、である。

偉大にして氣宇壮大な生涯であった。この円了の教育理念、建学の精神は今も東洋大学に生きており、「諸学の基礎は哲学にあり」をスローガンにした教育がなされている。

また、円了を偲んで毎年6月6日の命日に「学祖祭」が営まれ、四聖を祭る「哲学祭」では四聖についての講演がなされている。また、円了の業績と東洋大学の歴史を学生に語り継ぐための小冊子『井上円了の教育理念—新しき建学の精神を求めて—』を全学生に配布し、その読後感想文コンクールを行っている。更に、大学に「井上円了記念学術センター」が設置され、学祖の顕彰と共に広く近代日本思想の研究が進められている。

今年、校友会設立100周年を迎えるに当たって、その記念事業として円了の立像が建立されるのを見ても、円了の建学の精神がいまなお脈々として伝承されている証である。

（東洋大学文学部教授 針生清人）



円了自筆の絵葉書

